

社会主義運動史研究会から 運動史研究会へ

——伊藤晃氏インタビュー

解題

社会運動史研究には2つの方法がある。1つは、ある歴史上の達成／勝利に立ち、ここから演繹的に過去の歴史的経験を繙くという方法であり、もう1つは、ある歴史上の失敗／敗北の反省に立ち、ここから過去の歴史的経験を現在の課題に引きつけて繙くという方法である。運動史叙述の言説空間の力学のなかでは、「官許」歴史学としての前者が「正史」を叙述してきたのに対し、後者は「正史」により周縁に追いやられた人びとの手になる「対抗的な歴史」を生み出した。

1977年創設の運動史研究会は、京都大学人文科学研究所「社会運動の研究」班（1966-81年）と同じく、そのような「対抗的な歴史」を生み出す場として機能し、機関誌『運動史研究』全17号（1978-86年）を残した。「社会運動の研究」班が日本近現代史を専門とする職業研究者中心の構成であったのに対し、運動史研究会には戦前戦後の運動を担った当事者——その多くが共産党の活動を担い、のちに共産党を離れた——が結集した。運動史研究会が残した数多くの〈当事者の語り〉は、当時の運動のスタイルや当事者の息遣いまでも今に伝える。

今回は、長く運動史研究会の事務局を担った伊藤晃氏（元千葉工業大学教授）のインタビューを、2020年2月15日に東京都新宿区で実施した。インタビュー実施者は、黒川伊織（神戸大学）、宇野田尚哉（大阪大学）、戸邊秀明（東京経済大学）、福家崇洋（京都大学）の4名である。

本インタビューでとくに注目したいのは、戦前の運動と戦後の運動をつなぐ世代である伊藤氏が、自ら〈当事者〉としての問題意識を抱いて社会運動史研究に取り組み、そして運動史研究会を支え続けたように、社会運動史研究もまた社会運動の一環として展開されたという点であり、さらには、「対抗的な歴史」叙述の主たる担い手となった構造改革派（1961年、共産党8回大会により除名・離党）はその思想／運動をいかに展開させたのかという点である。本インタビューが、史学史のうちに社会運動史研究史を十全に位置付ける材料となるとともに、今後の社会運動史研究が踏まえるべき「多様性」を考える手がかりとなることを願ってやまない。

（黒川伊織）

- 1 1960年代という時代
- 2 「近代日本」について何を考えたか
- 3 日本でのグラムシ研究のはじまり
- 4 私にとっての共産党と学生運動
- 5 「自由放任」の教育大日本史
- 6 社会主義運動史研究会
- 7 どんな考えで社会運動史研究をはじめたか
- 8 聞き取りについて
- 9 素人学者たち
- 10 渡部義通『思想と学問の自伝』
- 11 「運動史研究会」のこと

1 1960年代という時代

——私たちはこの企画で、運動史の研究がどのように成立してきたのかを分析する予定です。その際に、既に労働運動史研究会などがあった東京では、どのような人びとを担い手にした運動史の語りが運動史研究会につながるのかを知りたいと思い、今回、その手がかりの一つとして、伊藤さんにインタビューをお願いいたしました。

伊藤 私は、今あなた方が言われたことに十分には答えることはできません。私は非常に世界が狭いんです。運動の面でも、学界においても私は大きな団体に加わって活動していないから、東京全体の動きはお話しできない。私個人としてそれ以前の勉強がのちの運動史研究会での活動にどうつながったか、くらいしか話せませんが、一応聞いてみてください。

まず私が勉強をはじめた1960年代という時代がどういう時代だったか、ということです。

私たちの世代はまだ戦前の世代とつながりのある世代でした。60年代には戦前の活動家がまだ多数生き残っていました。たとえば、65年から私はこの人びとへの聞き取りをはじめますが、最初に話を聞いたのが福本和夫さんで、この人はまだ70歳になったばかりでした。そんな時期だから、話を聞こうと思えばいくらでも聞けたんですけど、あまり系統的にはやられていないようでした。大河内一男さんを担いだ労働運動史研究会[57年発足]というのがあって、ここでいくらかはやっていましたが、むしろ京都の方が渡部徹さんを中心に精力的だったことを後で知ります。つまり、戦後の運動史研究がはじまってまもなくだということもありますが、戦後の運動は戦前の運動に対して冷淡だったと思います。それは多分、運動全体が、戦後には新しい運動がはじまって戦前は過去のことになった、あまり参考にならない、と考えていたからですね。産別会議なんて、戦前の活動家をほとんど排除したでしょう。本当は、戦後の運動は戦前と地続きなんだけれども、これが十分意識されなかった、ということです。私はその地続き性を意識したことになりますが、それは戦後の運動思想にかなり批判をもっていただと思います。そして戦後の運動思想は戦前に根があるようだ、とかなり早い時期から思っていました。

たとえば、私はもともと日本史学専攻なんですけれども、当時日本近代史の指導理論はマルクス主義だということになっていました。私も学生時代から今日までマルクス主義者だから、それはいい

いんだけれども、当時のマルクス主義がはなはだ古色蒼然としておりましてね。まったく戦前からの地続きそのものです。講座派と労農派との対立なんてのがまだ生きていたんだから。私はこれに批判的になりますが、それには1960年代という時代背景があったことをはっきり感じます。

この時代は日本資本主義が大きく躍進して「遅れて弱い日本資本主義」を思考の前提にしていたマルクス主義者（労農派の方もそう思っていた）は現実から取り残されます。また戦後民主主義がこの時代にある安定形態——それは根底に国家と民衆運動との妥協・和解があったと思いますが——に達して、天皇制などにも生きた関心をもつ人がほとんどいなくなります。この中で、マルクス主義を、この現実を解釈できる、さらには変革できる思想として作り直さなければならない、と考える人びとが一定程度出てきます。私はこの流れの中で思想形成をしたということです。

日本でのこの動きにはまた世界的背景があります。1956年にソ連共産党20回大会でスターリン批判がはじめられる。これが化石化した「マルクス・レーニン主義」（スターリン主義のことをこう言っていた）を溶融させようという世界的流れを生みます。日本ではこれを受けて二つの革新派が生まれます。一つはトロツキズムに傾斜する人たち、学生運動の中のブントなど。もう一つは当時のイタリア共産党の新傾向、トリアッティ・コースとでもいうか、これの影響も受けて先進国革命の思想と運動を模索する集団。私はこの後者の方の立場を取ることにになりました。

ついでに言うと、このころは日本では珍しく、共産主義運動の中で自由な発言ができた時期です。国家権力の抑圧がないことはもちろんですが、運動内にあった共産党の強い言論・思想統制力が一時的に弱まっていたからです。共産党は戦後失敗続きで、55年にいわゆる六全協（第6回全国協議会）で再出発をはかっているころ、党中央部の権威が地に堕ちている時期でした。

——それはどれぐらいの時期なんですか？

伊藤 共産党の8回大会〔61年8月〕で宮本顕治派が完全に制圧するまでです。私は59年の大学入学ですから、このころの空気を少し呼吸したことになります。今から思うと、運動批判の議論に熱気が感じられた時期です。

その中で印象に残っているテーマは、たとえば、労働運動で言えば、一つは、私には難しい議論でよくわからなかったけれども、賃金論。今ベース・アップという言葉を誰でも普通に使うでしょう。しかしベース賃金というのはそもそも企業主導の賃金の形で、生産性に応じた賃金にもつながるものですね。当時はこれを克服しなければならないということで、本来の賃金形態、結局は生活給か労働の量・質に応じた賃金かという議論がずいぶん盛んだったと思います。

もう一つは、これは今も盛んだけれども、企業別組合でよいのかという議論。産業別組合がこれに対置されますが、日本ではこれがどうしてもダメなので、今はユニオン運動などが議論されますが、当時は企業別組合もけっこう戦闘的だったから、その戦闘性を職場闘争で強めようという議論があった。58年に総評が「組織綱領」というものを作るんですね。清水慎三さんが中心で。その重点は職場闘争論です。職場闘争の花形は三池炭鉱だということになっていたが、ところがその三池争議が60年に負けるでしょう。すると総評はたちまち職場闘争に自信をなくして、この「綱領」を草案のままお蔵にしてしまうのです。僕はこの経過を後で知ったのだが、職場闘争論議は少し聞いていて、職場の運動という問題関心として残り、のち、戦前の、職場に日常大衆闘争をどう創出するかでいろいろ考えた日本労働組合評議会を研究しようと思うようになる、その動機につながっ

たとは言えるでしょう。

しかしこういう運動批判の議論が歴史的な研究を生み出すということは、全体として弱かった。石堂清倫さん、渡部義通さん、京都の渡部徹さんなどはまず例外でしょう。結局日本の運動は、日本の近代思想全体もそうですが、いつでも何か新しい思想を外から持ってきてそれで古いものを克服しようとする、ということを繰り返しているでしょう。歴史意識がブツ切りになってしまうのですね。私たち学生仲間で戦後の運動は5年刻みだな、なんて議論をしたことがあります。

2 「近代日本」について何を考えたか

伊藤 そういうわけで、私の日本マルクス主義史への関心は、戦後日本の現実と古い思想との矛盾の意識から出発していますが、この意識自体は当時別に珍しいことではなかったのです。それが運動史研究においては一步立ち遅れていた、ということではありませんか。

とにかく私は問題意識がそうだから、それを日本近代全体にまで延ばして、ことに講座派が固執した日本資本主義の古い遅れた「型」、しかしそこには急速な「発展」があったじゃないか、それが民衆の運動を圧倒し続けたのじゃないか、という問題を感じました。この「型」と「発展」の矛盾という問い自体は、これも昔からあったものです。そもそも講座派の先達、服部之総や野呂栄太郎に、そういう言葉は使わなくても、その問いはあった。それを引き継いで戦後も、遠山茂樹さんの『明治維新』の序論は、この矛盾を軸にマルクス主義近代史研究を振り返ったものでした。

ここで私の恥を一つお話しするとね、私は67年に公表した初めての論文〔「唯物史観の形成と日本近代史研究」『史潮』100号、1967年10月〕でこの問題を取り上げたのですが、私は後でも言いますが、大学に入ってもアカデミックな勉強を少しもやらなかったから、近代史研究者をめざす者の第一の必読書であった遠山さんのこの本を読んでいなかった。それでその序論に書かれたことを、そのまま繰り返すことになったのです。幸い私の論文など読む人はいなかったから、別に問題にもされませんでした。

しかし私は遠山さんを真似したのではなくて、自分で考えてそうなったのですよ。私は天皇制についても、古いものであるはずの天皇制権力が近代的発展の担い手になるのはなぜか、という疑問を出発点にしています。私は「反革命による進歩」という言葉を使って仲間と議論したことをよく覚えています。のちにグラムシの「受動的革命」の概念を知って、これはこのことに関係があるかな、と思いました。

もう一つついでに言うと、当時日本近代史研究のマルクス主義にかわるオルタナティブとしてアメリカから「近代化論」というのが入ってきて、ライシャワーやロストウがもてはやされましたが、これは近代日本を全体的、構造的にとらえるには役に立たないし、大体軽薄な感じがあって真面目に付き合う気にはなりません。

それから「型」と「発展」の問題は、当時実際的な意味もあったのです。前にふれた先進国革命論ですが、これは「資本主義に民主主義的な力によってその構造にまで及ぶ改良を重ね、この民主的改革を通じて社会主義革命をめざす」という議論に向かっていきます。いわゆる構造改革論、当初は構造的改良論と呼んでいました。ところがこの理論に一つ問題があったのです。現代資本主義

における生産力の急速な進歩は生産のますますの社会化を要求する、資本主義の発展の中に社会主義への条件が準備されていく、といった論で、ここからは、そういう発展を妨害するあり方をどんどん改革していけばよい、という考えも出てくるでしょう。一種の必然論で、これは古いマルクス主義の特徴ですが、そのころ構造改革論の理論家として私たちにも影響が大きかった佐藤昇さんが『しのびよる社会主義』[1965年、副題は「動態的世界経済入門」とある]なんて本を書きましてね。「なんだ、夜這いみたいな社会主義だな」と私たちは笑いましたが。つまり進歩を妨げる古いものと戦うのは当然だとしても、「発展」自体がどういう矛盾を生み出すのか、という考えが不足していたのだと思います。

当時は世界史もそうした楽観論に味方しているように思えました。社会主義体制というものがある、資本主義体制を圧倒するだろう、世界戦争さえ起きなければ、平和的競争の中でその方向で進むだろう、ということです。ソ連のフルシチョフが誇示していたこの見通しは日本の先進国革命論者のいわば公式のようなもので、この流れの人びとは、私もそうでしたが、当時の中ソ対立についてはほぼ親ソ派で、親中国派の共産党宮本派に対抗しました。

結局、発展の将来を見ようとする構造改革論は、その発展自体が生み出す諸矛盾をとらえて、そこにどういふ運動課題を見出し、独自の運動を構想するかという点で、貧困でした。大阪あたりの労働運動にいい動きもありましたが、全体としては、共産党宮本派（日本の対米従属を言い、民族解放を重視する）と向坂逸郎らの社会党「左派」と、この二つの保守派に挟撃されて衰退したのです。

学生の私たちも同じ問題を抱えることになりました。私が在学したのは東京教育大学というのですが、ここでは60年代半ばに筑波移転問題というのがありました。文部省に学内の教員の多数派が応じて、筑波研究学園都市構想に乗ろうというのですが、文学部教授会中心の「進歩派」教員と学生がこれに反対した。私たち構造改革派も反対でしたが、しかし、権力の「大学の自治」（つまり教授会の自治ですが）剝奪に反対、大学の帝国主義的再編に反対ということだけでよいか、という疑問もあった。問題の根底に経済と科学技術の進展がある以上、歴史的後方の立場からの戦いではダメだろう、「発展」が必ず生み出す新しい矛盾と対抗関係を見通して、そこに運動課題を見出す必要がある、と考えるのですが、では具体的に何をどうすればよいのか、ということになると何も知恵が浮かばなかった。教育大の学生構造改革派は、党派の通称としてはそういう名が残るけれども、思想的にはこの闘争の中で消滅した、と私は考えています。

3 日本でのグラムシ研究のはじまり

伊藤 構造改革派の思想的中心と目されていたのは、井汲卓一さんでしょう。私も井汲さんをお大変尊敬したけれども、直接言葉を交わすのは70年代に入ってからです。私が学生時代から長く教えを受けたのは石堂清倫さんと前野良さんです。グラムシ思想についてもこのお二人が私の師匠です。前野さんは社会主義政治経済研究所というものを経営していて、これは欧米のマルクス主義の先端的動向を私たちが知る上でかなり功績のあった機関です。

グラムシについて少し話しましょう。この人は50年代までは日本でほとんど知られていません

が、60年前後、イタリア共産党の政治に斬新なものを感じる人が多く、それも背景となって石堂さんたちの紹介が世に迎えられるようになりました。イタリア政治に造詣が深いということで山崎功さんの名も知られました。61年に合同出版から『グラムシ選集』が出はじめ、私たちはこれでグラムシ思想に接するのです。

当時東京でのグラムシ研究の中心は「東京グラムシ研究会」でした。石堂・前野・中村丈夫・上杉聡彦・上村忠男（まだ学生だった）といった人たちが中心で、その共訳で64年に『現代の君主』（青木文庫）が出る。その輪読会に参加して、私もこの会の末端に連なることとなります。この会はその後しばらくして消滅しますが、それは私にも責任がある。会を若い人の力で、という声があるところから出て、新参の私が運営責任者を押しつけられることになったのです。私はまったく困惑した。大先輩たちの間で、多少引っ込み思案だった私は何をどうしたらよいかわからない。とうとう任務を放棄して、それで会が立ち消えになったのです。それでも石堂、前野両氏をはじめ、私に同情したか、非難する人はいませんでした。ありがたいことでした。

当時グラムシ研究は、「獄中ノート」の完全復刻以前の段階ですが、「マルクス・レーニン主義」（スターリン主義）を克服しなければ運動も思想も前進が覚束ないという切実な必要の中での先覚者たちの仕事でした。この人たちは、頑強な保守主義・公式主義の抵抗の中で、過去の運動の歴史的総括と世界史の新段階の検討を進めながら、つまり変革の理論としてのマルクス主義再生をめざすいろいろな視角との関連で、それぞれにグラムシの特異な諸概念の理解を仮説的に深化させていたのだ、と私は感じます。そこで、グラムシ思想のなにか体系として成ったものを受容するというより、龐大な「獄中ノート」の一つ一つの断片に含まれる従来の思想とは異質なものとそれぞれに格闘し、その中でグラムシ的概念がそれぞれの仕方で各人の思想の生身に食い込んでしまった、というのが実際だったでしょう。

それは、先達のあとを息せききって走った私についても多少は言えることです。当初一種のグラムシ人気広がりましたが、そこに構造改革論につながるものとか、何か手軽な「効用」を求めるような人は、思想的な苦闘に耐え得ず、わりあい早くグラムシを「卒業」してしまいます。幸いに私はそうならなかった。私は今日まで、自分の歴史研究の方法論的基礎にグラムシ思想を置いているつもりです。石堂・前野両氏の言うところ、それを通じて難しいグラムシの考えを反芻し続けて老年に至った、という感じがします。

4 私にとっての共産党と学生運動

——伊藤さんは共産党には入れなかったんですか？

伊藤 60年の夏に入りました。ただそのころ、学生が入党するというのは、大きな大学ほどそういうケースが多かったのじゃないかと思うが、その大学の学生細胞に入るということで、日常的に党機関の統制を感じることはあまりなかった。学生運動の全国的指導部と、そこでの党派対立の方が気になる、思想的活動家集団という面があるのです。教育大細胞は共産党内では宮本批判派ですが、私はそれを承知の上で、むしろその立場を支持して入党している。ついでに言うと、60年の春に全学連は分裂して、ブント派主導の主流派に対して共産党系は「全国学生自治会連絡会議」

(全自連)なる別組織で安保闘争を戦うのですが、この共産党系にも内部に二つの流れがあったわけです。

だから61年に反宮本派が党を追い出されるとき、教育大細胞は8割方離党しますが、私もためらいなく党を脱けるのです。

それで考えてみると、かつて共産党員あるいはその支持者であることがマルクス主義者であることの証しである、という強固な思想がありました。スターリン主義の全盛時代は戦後だから、戦後党員にもそれは残っていました。私たちは内面にそういう規制を感じなくなった世代なのです。私は離党グループのゴタゴタの中で、それに関わることをやめてしまいましたが、このときも別に心に葛藤はなく、いつそうなったか覚えていないほどです。といて、私たちは、年長の党員世代と付き合っていますから、この人たちの感情、つまり党権威主義、その苦しみを内面で克服する過程を多少は理解できるのです。私たちの次の活動家世代になると、この点少し違うでしょう。わずかの時差ですが、ここでも日本の運動はやはり5年刻みですね。

——学生運動にはどれぐらい関わられたんですか？

伊藤 私は普通の学生で、高校時代は何の経験もない。しかし当時の若者は自分の立場を政治的・思想的に考える傾向が今よりは強い。私もそうで、左の側に立つ立場をはっきり意識していました。そして大学に入ったら学生運動をやるのは当たり前と思っている。それに教育大、とくに文学部は特異なところで、学生の大多数が私程度には左派的だった。私が属した日本史学専攻などことにそうで、あきもせずに繰り返すクラス討論が私の活動家としての第一歩です。よく覚えているのは、4月に入学してすぐ、メーデーに学生が参加することの是非、そこでのジグザグ・デモの是非という議論。私を含めて大半は是を主張しましたが、非の立場の者もそれなりの論があってね、半日以上議論したな。みながまとまってできる行動の形は何かということです。「程度が低い」と思うでしょう？ しかし後日私が運動史研究の中で、大衆の状況の中から運動が生まれてくるのはどういう過程か、に強い関心をもつのは、このへんが原点なのかもしれません。

入学してから翌年6月まで安保闘争で、もちろんみな国会前に皆勤しましたが、特別なことはやっていない。だいたい全学連主流派にくらべてわれわれ反主流、「全自連」派は派手さがなくてね、世間的注目を集めたのは「ハガチー事件」くらいかな。むしろ私が運動に深入りするの安保の後です。安保の「敗北」後、学生は知識人の卵だからみなかっこよく「挫折」するのです。活動家の中の活動家をもって任じていた連中が、いつの間にか姿を見せなくなる。私は愚直で、改定安保条約が実質化されるのはこれからだ、挫折なんぞしてられる場合か、ということで、数人で自治会室でがんばります。自然目立って中心に押し出され、文学部自治会の副委員長をやったり、全自連事務局を手伝ったり。そのころ新島ミサイル試射場反対闘争というのがあって、東京地評とともに全自連も大いに働いた。そのときのリーダーが、中央大学Ⅱ部の中心だった丸山茂樹さんです。

5 「自由放任」の教育大日本史

——日本史学の勉強の話をしてください。

伊藤 当時の教育大の日本史学は家永三郎さんと和歌森太郎さんがいわば看板教授ですが、全体と

してある水準を保っていました。学問をするにはいい雰囲気なんだが、私は学生自治会に深入りしてからはまったく授業には出なくなった。アカデミックな勉強は本当にやっていません。それでも私は学究派に立ちまじって大きな顔をしていました。それには理由があってね、教育大の日本史教室には変わった「自由主義」があったのです。もともと家永さんあたりの発想かもしれないけれど、学生は勝手に勉強しろという。基礎的な授業はきちんとしているし、聞きにくれば立ち入って教えもするけれども、ゼミナールに所属しなくてもよいし、卒業論文や学位論文も助言を受けたくなければ受ける必要はない。自分で好きなようにやりなさい。そのかわりその結果には自分で責任をもちなさい。就職も自分で探しておいで、とこんな風です。これが私には大変ありがたかった。授業には出ないが、まさに「自由」に本は人一倍読んでいたから、外れ者扱いされたことはありません。そして実際、卒業論文も修士論文も先生の助言は一つも受けずに書きました。

自由放任だから学生が勉強しないかというところではなく、真面目に勉強する雰囲気は強かった。学生どうしの研究会がたくさんありました。大学院の学生や若い助手がいればそれが中心になって、自分の勉強の時代や分野の見当がついた学部学生がそこに「入門」してくる。私も一つ研究会を主宰しました。授業に出ない私が大学院に行くというと、さすがにみな「大丈夫か」と笑いましたが、ちゃんと合格して、しかも現代史をやって博士課程まで行ったのは教育大では私が初めてで、それで現代史志望の学生の研究会を作ったのです。のちに述べる社会主義運動史研究会と中心メンバーは重なっていました。

またこれは、サークルとしての歴史学研究会とも多少重なっています。そのころ学生の歴研は、単なる歴史好きが集まるといふより、どこの大学でも社会科学研究会（社研）と並んで学生運動活動家のプールのような面が強い。私はこの歴研に入学早々に入りますが、ここで記憶しているのは、3年上級に田村貞雄さんたちがいました。この人たちは、私が入学前、運動面の有力な活動家だったらしいが、そんな風には見えず、深遠な様子で学問の話をしていました。どうやら、これも共産党の大失敗への六全協以後の反省期の一表現で、この人たちは、政治の「憑き」が落ちて「学問の季節」に入ることにしたようです。この政治と学問の間の揺れの影響をまともに浴びたのが私たちの1年上の日本史専攻の人たちで、みな意気が上がりませんでした。何か頭が混乱していたようで、ちょっと気の毒な感じでした。

もう一つ、この混乱のおかげで私は得難い経験をしました。50年代まで労働運動の中で職場のサークル運動が盛んでした。文芸、スポーツ、コーラスなど各種ある中に歴研や社研もあった。教育大の近くに厚生省統計調査部の職場があって女性労働者（だいたいキー・パンチャー）が大勢いました。ここにも歴研と社研があって、いつからか歴研には教育大歴研から、社研には東大から学生がチューターとして行くことになっていたのです。私が入学して歴研に行くともなく、ここにチューターで行けという。1年上の人が行っていたのだが、もうそんな意欲も気力もなくなってしまったらしい。まだ子供と言ってよい私が一人で行くことになりました。井汲卓一さんのやさしい戦後経済史の本がテキストでしたが、何もわからないでどんなことをしゃべっていたのか、思い出すのも恥ずかしい。労働者たちは文句も言わず、親切に付き合ってくれましたが、これは後から考えると大変な経験だったのです。安保闘争を境に60年代に労働者のサークル運動は全国で衰退したとされます。だからこの運動の最後の段階を私は体験したことになるのですね。

——サークル運動は、なんでつぶれたんでしょうね。

伊藤 安保闘争でサークルどころでなくなり、再建すべき時期には世の中が変わっていたということでしょう。職場サークルは、中学卒の労働者が多く、生活に楽しみが少ない時代に、労働者の自己教育と楽しみの場だったが、高校進学率も上がり、生活がだんだん豊かになってそれを受け止める文化の商業化が進んだのがこの時代だったと思います。

6 社会主義運動史研究会

伊藤 運動史研究をはじめの話をしましょう。

私は活動家らしく学部で5年かけて、64年に大学院に入ります。運動史研究をやるのはそれから。学部の卒業論文は満州問題です。研究分野を変えたのは、自分のやっている運動が、せまい意味でも党内闘争で敗北しているし、一般的にも前に述べたように敗北が意識される。その敗北をもたらし運動の構造と思想を歴史的に考えてみたい、勿体をつけて言えばそういうことです。

65年から聞き取りをはじめます。最初に聞きに行ったのが福本和夫さん。これは偶然のことで、かつての東京グラムシ会の長老、石堂さん、前野さん、中村丈夫さんたちが若い者を気に掛けて一緒に勉強会をやってくれていた。たまたま私が福本の思想を担当して報告したのが評判がよく、自分でも興味を引かれて、それがきっかけになったのです。山川均、河上肇らの公式的マルクス主義と少し違う変革的マルクス主義の匂いを感じたのです。今考えてみて私のこの見当は大当たりだったと思います。福本という人は、ドイツに留学して、ルカーチやコルシュを通じてマルクス主義を勉強した人です。ルカーチやコルシュは20世紀マルクス主義、と私は言うのですが、19世紀末俗流化した公式マルクス主義に対して、マルクスの方法に帰って世界の新しい現実に対応できる変革的マルクス主義の創造をめざす流れ、レーニン、ルクセンブルク、グラムシらと並べて理解すべき人たちです。だから福本さんは、当時も今も一般にそういう認識はないけれども、20世紀マルクス主義と日本の運動とをつなぐ位置にあった人なのです。福本さん自身は後年までそのことにまったく無自覚だったようにみえますが、福本研究は現代的な意味をもっている、と私は今も考えています。

66年に、有志で運動史の研究グループを作りました。「社会主義運動史研究会」と名乗り、68年から会報を12号出しています。メンバーは山口孝一君（私と同級）、三橋洋一君（私以上に会の牽引力だった）、高崎宗司君（のち朝鮮問題の専門家）、村上雅盈君、松本馨君、松岡（のちに国枝）哲夫君ら、みな教育大の学部、大学院の学生で学生運動家でもある。のちにだいたいが学校の教師になり、途中で抜けた高崎君は別だが、学者になった人はいません。

この会は聞き取りを精力的にやりました。定例研究会は、たとえば東京市電自治会（29年から東京交通労働組合）について関係者から聞くとすれば、だれかが担当してこの組合の歴史を詳しく調べ、それをみなで議論してそれで聞きに行く、といった風です。みな随分勉強して、その勉強の場が法政大学大原社会問題研究所でした。研究員だった二村一夫さんや、谷口朗子さん、是枝洋さんたち職員は親切で本当にわれわれを大事にしてくれました。私たちにとって大変恩義のある研究所です。市ヶ谷のキャンパスや麻布の古い建物の中にありましてね。閲覧室がなくて、事務室の空

いた机で私たちは調べものをする。私なんかここを自分の勉強部屋のように感じていました。ところが不思議なことに、そんなに入り浸っているのに、ここで他の研究者が来ているのを見かけた記憶がない。あまり来ていなかったんでしょうかね。

聞き取りをした人の名前を挙げてみましょうか。小林輝次、藻谷小一郎、西川彦義、山我徳一、谷口伊次郎、西村祭喜、志賀義雄、横井亀夫、新明正道、山崎一雄、西山改め山崎雄次、岩内善作、津本賢秀、関根晃信、萱野義清、斎藤忠利、秋山長三郎、伊達廉一、赤島秀雄、倉重新、春日庄次郎。ほかにもいたと思いますが、これだけは会報から拾うことができます。左翼労働運動の関係者が多い。私たちが左翼運動をやってきてその過去を知りたいということもあるから、まず左翼に焦点を当てた。もう一つ、戦前の日本労働組合評議会は、労働運動が日常的な大衆運動になるためにどういう形を取るべきかを考えた運動で、私はこれに非常に関心があったからです。

ところでこの人たち、あなた方が知らない人が多いでしょう。半分くらいはわかりますか？ この人たちはほとんど、戦前によく知られた運動で大きな仕事をしてきた人なのです。それを皆さんが知らないというのは、何十年かの間に忘れられてしまったということです。彼らが無名になっていることが重大で、戦前の運動と戦後の運動の切断をこの人たちの無名性が表現しているというわけなのです。二つの時代をもう一度つないでみたいということで、忘れられた人を掘り起こすことをやったのです。

今思い出しても、われわれの方で感動するくらいこの人たちは喜んでくれましたよ。戦前はだれでも知っている組合だったのに戦後にはだれも知らない。自分の運動に誇りもあり苦労話もあるけれども、だれにも聞いてもらえない。だから自分たちの運動にもう一度注目しようというのが若い連中から出てきたということで、非常にうれしかったのだと思います。聞き取りを申し込んで素っ気なく断られたのは、私の覚えている限りでは一人だけでした。

社会主義運動史研究会は他大学からの参加はなかったし、先輩研究者との関係もなく、労働運動史研究会との交流もありませんでした。山辺健太郎さんと松尾洋さんに研究会に一度来てもらって話を聞いたくらいです。関西の先輩研究者、渡部徹さんと松尾尊兌さん、岩村登志夫さんたちとも連絡はありません。しかし、助けてくれた人が何人かおられます。その一人が石堂さん。研究会にも毎回来てくれました。この過程で私は石堂門下と言われるようになります。それから横井亀夫さん。評議会の最年少の活動家の一人で、「横井少年」と当時の人で戦後もそんな風と呼んでいた人がいました。面倒見の良い足まめな人で、戦後京浜の労働運動でも知られていましたが、評議会の関東地方の生き残りの人をみな知っていて、私たちとのつなぎ役になってくれた。さらにもう一人竹村民郎さんは私たちより10歳ほど年長の歴史研究者ですが、こちらの考えをよくわかってくれる助言者でした。松尾尊兌さんや伊藤隆さん（まだ右派ではなかった）も同年輩ですが、私から見て近代日本社会を全体として構造的にとらえる方法論は竹村さんのもの、と思えました。グラムシ思想に食いついている人でもあった。私個人にとっては師匠の一人ですね。この人は50年代には労働者の歴史サークル運動でも仕事をした人です。

下村亮一さんの名前も挙げておきたい。当時よく知られた右派出版社、経済往来社の社長です。戦前はまありベラル派で、石堂さんが日本評論社にいたころの同僚です。戦後は右派的な人だけれど、石堂さんから私たちのことを聞いて、その志に共感してくれたようで、励ましてくれました。

多少お金の援助もしてくれて、それで当時まだ一般的だった大きなテープ・レコーダーを買いました。会のかくれた恩人です。

7 どんな考えで社会運動史研究をはじめたか

伊藤 さて、社会主義運動史研究会は何を考えたのかということですが、創立の趣意書を見てみます。私が書いたものですが、まず「この会を通じて労働運動、社会主義運動の新しいあり方を探っている人びととつながりたい」と言っている。そして「日本の運動の発展を促進するような要素、あるいは逆に発展を阻害する運動構造や運動の性格を歴史のなかで明らかにしてみたい、大衆の運動が日本の近代社会に刻みつけたものを知りたい」と言い、この関心から今の運動史研究を見てみると、細かい研究が一貫した視野に貫かれていないという欠陥があるんじゃないか、研究に全体的な視野を取り戻し、過去の運動経験を現在・将来の運動の中で生かしたい、そのために運動の諸先輩と協力するのだと。24, 5歳の若い者の言い分としてはずいぶん生意気ですね。

しかし今振り返ってみると、現存する運動が批判・変革されねばならないと非常に強く思っていたことはたしかです。運動を批判して再構築する、その流れに加わりたいという強い意欲、つまり運動上の意欲からこの会を作ったのです。そして運動批判を歴史の批判から考えたいと思うから、過去の先輩たちとつながりたい。聞き取りを中心とするのは当然のことでした。アカデミックなものとはつながることが頭に浮かばないというのも、これも当然でした。

そして当時の左派学生にはこういう抱負を聞いて違和感をもたない状況はあったと思うし、それは会のメンバーに共有されていた。私はそういう具体的なあり方を通じてマルクス主義者でありたかったんだが、それも共通していたでしょう。実際会員は多くが高校の歴史教師になりますが、それぞれの仕方で現社会への批判的立場を持続して出世しないままで定年を迎えています。

——運動上の立場を意識しているけれども運動組織ではないんですね。

伊藤 そう、運動組織じゃありません。学生の勉強の組織ですね。そして運動の内面で古い人とながっていればよいと考えていて、成果を何かのメディアを通じて広く世に問う考えもない。実際成果はほんのわずかでした。少人数で、時間をかけて勉強するから効率が悪いのです。手広く仕事はできない。だれにも知られず自分たちだけでやっていた会ですね。

——学生運動の活動家たちが共通の考えで集まり、そこでの勉強からまたそれぞれ自分で考えていったと。

伊藤 そんなところですよ。会自体としては次に何かに発展転化することはなかったが、筑波移転反対運動が負けたあと（全国学園闘争が負けたあと、と言ってもよいが）日本史の大学院学生は、大学批判・学問批判運動は続けようと、先生たちとも一緒に研究会のようなことをしばらくやりますが、私たちの会も、その考え方を生かして大学院にいたメンバーが一つの核になったと思います。そうそう、忘れていたが大事なことが一つあります。69年に東大新人会創立50周年記念集会というのがあった。会は大成功だったが、1月に東大構内でやったその当日が安田講堂陥落の日でね、会は強行したけれども大騒ぎでした。この会に私たちはだいたい協力しています。三橋洋一君が詳しい新人会年表を作って提供したのは評価が高かったと思います。

8 聞き取りについて

——聞き取りをする中で、何かの考えやスタイルが出来てくることもあったでしょう。

伊藤 その点、あなた方の最初の依頼の手紙にもあったから、当時の考えを少し思い出してみました。私の場合それが今日まで続いています。

聞き取りの目的には事実を明らかにするということがまずあり、私たちがたくさん事実を掘り出しましたが、同時に運動の状況、雰囲気を知る手がかりを得ることを重視していました。ある事実がどうして生まれたか、事実どうしの関係、どういう人がやっていたのか、運動組織のあり方など、当人に聞かなければわからないことも多い。しかしこういうことはだれでも気を付けて聞くことです。私の場合、とにかく人の名前を多く思い出してもらうよう努力したのと、それから当時の人たちが広くもっていた運動上の知識や考え方や感情、つまり心の中を教えてもらいたいと思っていました。たとえば20年代の初めごろ、堺利彦や山川均が書くリーフレットや、あるいは山川の『資本主義のからくり』なんてパンフレット、これらが運動に入りたての青年あるいは少年労働者（みな小学校卒、せいぜい高等小学校卒）にとってどんな意味をもっていたか。そういうことを、まさにこれらの出版物を読みながら育った横井亀夫さんが聞かせてくれたのです。それから、運動をやるからにはさまざまな願望があり、運動をやるものの誇りもある、失望もある。運動は緊張状態が続くから気持ちに強い張りがなければできない。その張りはどのように支えられるのか、それが崩れるのはどういう時なのか等々の問題。

人びとの気風だけでなく習慣や生活の形にも関心が高かったと思います。そうなる一つの聞き取り、一つの資料から一つの事実を引き出すといったことだけじゃなくて、聞き取りや資料を集合的にみて、そこから集合的なものの考え方、活動のあり方、運動の性質などを引き出す。毎日の運動の中に繰り返して出て来る事柄が案外大切になります。これは渡部徹さんたちが10年前に『京都地方運動労働史』（59年）でやったことでしょう。注意しなければならないのは、古い人たちが自分たちの日常のことなど重要だと思っていないから、こちらから引き出しにかからないとなかなか話に出てこない。何を着ていたかなんて、各時代、各種の労働者の気風を知る上で大切なことがあるが、その類のことです。賀川豊彦がデザインした「賀川服」というものが20年代の労働者活動家のある部分に愛用された。こんなこと、聞かなければだれの話にも出てきません。私は、これも横井さんがちょっと口にした、それで示唆を得ました。

運動史は大きな事件をつないでいけばできるのでなく、日常ありふれた運動生活をありふれた資料から構成するのも大事なのだということ、私がそういう考えを強くもったのは、フォークロア（民俗学）の影響が少しあるかもしれません。私のいた教育大は当時フォークロアの本場の一つでね、福田アジオ君が私と同学年にいました。

最後に、聞き取りは文書資料を批判するよりどころになる、ということがあります。文書資料はだれがどういう状況下で、どんな意図で書いたのかわからないと信用できないことがありますね。嘘を書いたわけでもなくとも実際とズレていることが多い。人の記憶もあてにならないことが多いから、聞き取り万能ではないけれど、逆のことも言えるわけです。しかしこれはあなた方がよくわ

かっていることですね。

9 素人学者たち

伊藤 私たちの運動史研究が現実の運動への批判と結びついた、と前に申しましたが、これは他人事としての批判ではなかったのです。自分たちも運動を構成する責任ある一員であると、これは若い者の気負いでもあります。とにかく歴史への批判は自分たち自身の運動の根底にあるものへの批判だった。そしてこれも前に言ったように、それは日本のマルクス主義を解釈の理論であるだけでなく変革の理論として再建したいという考えにつながっていきます。そこで出会ったのが石堂さんであり、また渡部義通さんだったわけです。

この人たちは、20～30年代、手探りで日本マルクス主義を創っていった、いわば創生時代の世代なのです。ブハーリンなどその時々の権威はあったとしても、一応体系として出来上がって受容すべきものとしてマルクス主義があったわけではない。それだから戦前には学生でも、マルクス主義を勉強するとき、これを「学習」とは言わないで「研究」というのです。大森義太郎や山田盛太郎など、大学の助教授クラスですが、彼らも学生にとってまあ兄貴分ですね。スターリンについても、彼の演説や文章はマルクスやレーニンとだいぶ異質ですから、ちょっと変だなと思ひ、しかし国際的権威の人だから疑うのは自分が至らないからだろうと受け入れていく。スターリンに絶対の真理を見るところから出発する戦後世代とは違うのです。

この世代に、アカデミックな素養はないのにマルクス派の学問諸分野の開拓者になる人びとが出てくる理由はそんなところにあると思います。私はそういう人たちを「素人学者」と呼ぶのですが、その典型が歴史学では近代史の野呂栄太郎や服部之総、古代史の渡部義通や早川二郎、経済学では井汲卓一。井汲さんなど、大学へは最初医学部に入り、ドイツ文学に移って卒業してから地方の旧制高校でドイツ語を教えていた。赤いというのでそこを追われて東京に出てきて、ちょっと産労などに関係しているうちに経済学をやるようになったということです。

この人たちは、私たちにもものを「教えて」くれることはなかった。井汲さんは、私の書いたもののあちこちに線を引いて、それを指で突いて早口で「ここ、面白い」「これは非常に大事だ」と。私はそれで励まされ、少し自信もついた。一方渡部さんは、私たちの幼稚な意見に対して、こちらは少し重い口調で、一般的に「それはこういうことだ」ではなく、自分の意見を言う。「俺はこう思うんだ……」と私たちを議論の相手にするのです。一緒に理論を創っていこうという感覚でした。

前にグラムシにふれたところで、20世紀マルクス主義の生成について言いましたが、日本にも日本なりにこの時代の空気を呼吸していた人がいた、ということでしょう。それがなかったら、福本さんがあれほどの旋風を巻き起こした理由がわからない。

20世紀初頭、時代の転換期において、一方にこの時代をとらえうるマルクス主義再生の努力があり、他方にアメリカニズムやケインズ主義——福祉国家への傾向など、資本主義再生への大きな流れがあった。両者の対決が、スターリン主義が前者の発展を封じたことも手伝って、第二次大戦後一旦後者の圧勝となった。70年代以降日本でのマルクス主義の総崩れはその中での現象です。

しかしこの敗北を挽回しようとする人びとはおり、私たちが結びついたのはこの人びとの中の戦前世代だった、ということになる。この人びとの理論創成時代にさかのぼることは、古いマルクス主義の保守ではなく、その変革、再度の創成に向かう場合、どうしても必要なことでした。

10 渡部義通『思想と学問の自伝』

伊藤 さて、こんな背景があって、私たちは渡部義通『思想と学問の自伝』刊行（74年）を手伝うことになります。もともとこれは社会主義運動史研究会の聞き取り企画の一つだった。しかしこの会の声援者の一人だった渡部さんに熱が入ってね、本格的な自伝の姿になってきたものですから、出版しようか、ということになったのです。会そのものは、会員がみな就職する時期で活動を停止しており、私と三橋洋一、松岡哲夫両君などがこの仕事をしましたが、それに増田弘邦、田中揮一両君が加わりました。前に話した筑波闘争時の大学批判活動で協働した仲間で、日本古代・中世史が専門、日本マルクス主義歴史学を発端にまでさかのぼって再検討したい、という意図があったと思います。出版までの経過はこの本のあとがきとして私がかきました。渡部さんは精魂を込めたという感じでしたね。現在の運動・思想の批判、自分たち自身の思想の批判的再検討をめざすものと、かつて若いころにそれをやった世代、この協力としてこの本は生まれたわけです。読者にもそれはかなり通じたと見えて、出来上がった本は世評もかなり高く、私たちにとってもうれしいことでした。

このころには77年に出来る運動史研究会の前史がはじまっています。

11 「運動史研究会」のこと

伊藤 運動史研究会については、私のおおよその考えを昨年刊行の『社会運動史研究』1号（新曜社刊）に『「運動史研究会」について』と題して書いておりますから、以下のお話はその補足となります。

この会は過去の自分たちの経験を記録して後世に伝えたい、という戦前活動家の願望を結集したものでした。こういう人たち、ことにかつての転向者が運動の反省を口に出すとまずいという雰囲気はかなり減っていました。コミンテルンもないし、共産党の権威も小さくなっているから、人びとの内面を規制するものが弱まって、口を開こうと思えば開ける状況だった。その場が準備されれば良かったわけで、運動史研究会がその役割を果たしたことになります。

しかし学者は敬遠したのか、日常会に顔を出すのは鈴木裕子さんくらいでした。私は終始事務局の責任者格、栗原幸夫（会の前半）、江口繁雄（後半）両編集長の手伝いもある程度やりました。別に研究者というのではない加藤恵子、前田知之、小山黎の三君が入れ替わりながらボランティアで事務局仕事をよく助けてくれました。また宮内勇さんの秘書の山崎茂さんがある時期まで会計上の記帳の仕事を大半引き受けてくれています。

私は10人の会発起人の一人ですが、飛び抜けて若く、しかも無名です。その私がどうして加えられることになったか、事情をお話ししておきます。

だいたいこの会は三つの人脈が合流して準備したとあって良いでしょう。一つは石堂さんの、これはかなり広い人脈。第二に1930年代左派農民運動や共産党「多数派」以来の宮内勇さんの人脈。それと三一書房の竹村一さんと栗原幸夫さんの人脈。ことに前二者の合流のいきさつを会の重要人物の一人、河合勇吉さんが、『運動史研究』12号に「断想・運動史研究会の楽屋で」と題する回想で伝えています。だいたいそこに書かれた通りです。76年に宮内さんが『ある時代の手記——1930年代・日本共産党私史』を河出書房新社から出すと、これが評判が良くて、宮内さんの旧友関係が賑やかになる。河合さんはその仲間の一人で、同時に学生時代から石堂さんと親しく、この二人をつないだのです。石堂さんのついでに私も。河合さんは前に言った新人会50周年のときから私を知っている。こうして企画グループが出来て、聞き取りのための座談会がいくつかやられた。多数派関係のものなどいくつかのち『運動史研究』に収録されています。

やがて宮内さんの本の増補版が、こんどは三一書房から出る。これをきっかけに関西方面とも連絡が固まり、しっかりした会を作って、三一書房を出版元にして機関誌を出そうという話になったのです。機関誌の構想は三一書房の社主の竹村さんと、相談役格に見えた栗原幸夫さんが立てたのでしょう。栗原さんは神山茂夫研究会というのを作っていて、機関誌『神山茂夫研究』を出していた。のちの『運動史研究』と同性格のもので、なかなか充実していました。そして多分私のことも知っていた。私は69年に『共和国』なる雑誌（もと慶應の活動家だった人たちが作った。残念ながら3号雑誌で終わった）に「福本和夫と日本共産主義運動」を書いていて、栗原さんはおそらくこれを読んでいます。

そういうわけで、会を実際に計画するとき、具体的に仕事をする人間が必要だということでみなさん私を思い浮かべ、あれを発起人に入れようと。それで君も入れという話が来た。こんな経緯だったでしょう。

運動史研究会の趣意書は栗原さんの執筆です。聞いてみたことはないけれども、間違いなくそうでしょう。これには、運動の下部にあった当事者、その内面にあった事、その生きた姿を伝えたい、党派的立場に立つ運動史、公式文書にもっぱら依存する運動史、こういうものから脱却したいと、こういうことが書かれています。私はこれらのことに100パーセント賛成しました。60年代から私たちがやってきたことを正面から受け止めてくれるものを感じた、ということです。

会が活動していた10年間、私はまずまずよく仕事をしたと思います。職は持っているし、自分の勉強もあるから、週1日、必要ならあと半日、丸々とられるのは大変だった。代表幹事の石堂、宮内両氏と栗原さんをはじめ、横井亀夫、河合勇吉、北野照雄、江口繁雄、丸山茂樹（会の後半、会経営の責任者格でした）といった方々が、やはり事務所（宮内さんの事務所に居候した。82年に宮内さんが亡くなってからはあちこち転々。五味川純平さんの居宅の一室を借りたこともあります）に週1日集まって万事相談し、仕事を分担するのです。しかし細かいことをあれこれやり、それらに脈絡をつけるのは私でしたからね。人間関係にもそれなりに複雑なことがあったが、しかしこの面では私は石堂・宮内両氏の人格力に大いに頼っていました。関西方面、ことに大阪の会員との不協和音もわずかながらありましたが、これは向こうの事務局長格・脇田憲一さんと連絡をとって調整したのです。

人間関係ということで言えば、一番困ったのは栗原さんが石堂・宮内両氏、とくに宮内さんとは

折り合いが悪くてね、結局栗原さんは途中で編集長をやめて出てこなくなる。最後には、宮内さんの死後ですが小さな事件があり退会してしまうのです。私は栗原さんと仲良くしていたし、信頼していましたから、そして栗原さんの言い分がわかるから板挟みという格好で、これは実に気が重かった。やむなく、会が終わった後も10年くらい栗原さんとは絶交状態が続いたのは辛いことでした。

こんなわけで、私は運動史研究会の重要人物なのですが、とって過大に考えてもらっても困る。たとえば石堂さんの回想録『わが異端の昭和史』戦後編は、会での私のことがたくさん出てきますが、それがまさに過大な扱いと感じられます。まあ私については5割程度割り引いて読んでください。この本自体は戦後運動史を研究する上での必読文献ですけれどね。

——運動史研究会が終わったのは担い手が高齢化したからですか？

伊藤 そうとも言えますね。しかし会活動の休止は86年で、そのころはまだ多くの人が生きています。だから続けられる条件がなくなったのではない。つまりは私たちが力尽きたということです。丸山茂樹さんが、彼本来の仕事が忙しくて出て来られなくなるし、私も10年間やって、いささかくたびれたんですね。最後に全巻の人名索引を、これは私の責任で作って別巻として出して、それで切り上げることにしました。

——再建の動きはなかったのですか？

伊藤 会がなくなるのは惜しい、寂しいという声が多かったけれど、再建まではね。大橋周治さんが具体的に考えようとしたことがあって、私も相談を受ける、ということはありません。私は清水慎三さんあたりが中心になれないかな、なんて考えましてね、実際会合を一度やって清水さんも顔を出しましたけれど続きませんでしたし、まあ無理だったでしょう。石堂・宮内両氏は気質はまったく違うけれど、人をまとめるということで得難いコンビになっていました。これは偶然でもあるわけでおいそれと再現するわけにもいかない。戦後の運動は戦前とは複雑さの程度も違いますしね。

2020年2月15日、東京都新宿区にて

話し手：伊藤晃（元千葉工業大学教授）

聞き手：黒川伊織（神戸大学）

宇野田尚哉（大阪大学）

戸邊秀明（東京経済大学）

福家崇洋（京都大学）

まとめ：伊藤晃・黒川伊織